

## V. 編纂あとがき

人には生まれながらにして、「史」という感性のチップが埋め込まれているのかもしれない。

郷里の大分に里帰りした折、広報紙を綴った「広報でつづる“まちのあゆみ”（上巻）」を目にした。ふと昭和三十年代にタイムスリップするがごとく頁一枚一枚をめくると、小学生の低学年の時分に町の広報に掲載された益永嘉之先生の『郷土の昔物語り』の記事を思い出した。そこには先生の郷土愛を広く後世に伝承しようとした崇高な気概が脈々と流れていることをあらためて新鮮に感じ心動かされた。それがこの度の編纂に取り組んだきっかけであった。

益永先生は、郷土における教鞭や教育委員会長としての郷土の教育・文化行政に尽力されたことのみならず、益永家代々は鎌倉の時代、宇佐神宮が豊前・豊後の国一帯に覇権が及んでいた頃の宇佐の出にして、旧中摩村（東域は下郷村金吉宮園樋山路に接し、北は津民村大野に界し西南は溝部村草本・吉野・平小野より宇曾・藤野木・長小野に交わり玖珠郡八幡村古後に隣する）の鎮守亀岡八幡神社の宮司としてのお立場もあり、郷土史に深い愛着と造詣は『郷土の昔物語り』に満ち溢れている。また先生は当時の山国村広報誌「山国たより」に昭和30年（1955年）12月号から昭和34年12月号にわたり「郷土の生活文化物語」として原始時代から近代に至る地域の諸般を45遍にわたり綴っている。

編纂者は、我凡人にも解せるようにと物語りの一語一語の意を紐解きながら、補説を試みた。この作業で『郷土の昔物語り』の背後に在る、当時の都を中心にした大きな世のうねり、とりわけ大きな夢と強い志ある人間の意志と、その志の蠢（うごめ）きが人の道を開き『郷土の昔物語り』の源泉となっていることを確信した。取り分け、人のダイナミックな動きは、現在の情報通信社会・車社会のスピードという時間尺度を超越するものである。

編纂の意義は、先達者の功績に畏敬の念をはらって伝承に取り組み、『郷土の昔物語り』を現代の目線で付加価値を如何にあげて読者の琴線にふれ、結果としてその感動が郷土愛の伝承を永遠のものとするにある。

編纂作業の中で、諸氏が昔物語を紙芝居形式での伝承に尽くし、また諸方では郷土の歴史探訪クラブ等の活動に勤しんであることにも触れ、同志に対し畏敬の念と編纂者自身が啓発るものを覚えたことを気づきとして記したい。

今回の編纂にあたり、在住の横浜と大分の間を数度の渡り往来したが、この場にて多くの関係者の暖かいご協力に感謝申し上げます。

平成24年（2012年）は、北部九州の豪雨で山国川本流、支流の各地域で大きな災害に見舞われ、各地の物語りの伝承地も被害が出ていることを目のあたりにした。地域の一刻も早い復興を衷心より願っています。

平成24年10月吉日

編纂者